

Contents	
1	大学博物等協議会 2018 年度大会・第 13 回日本博物科学会開催報告 香川大学博物館 館長 寺林 優
3	資料をめぐる国立歴史民俗博物館のミッションについて 国立歴史民俗博物館メタ資料科学研究センター
4	「2018 年夏、再オープン！東京工業大学博物館」 東京工業大学博物館 研究員 棚橋 沙由理
6	富山大学 和漢医薬学総合研究所 民族薬物資料館 「生薬の変遷 ―近年 50 年の歴史―」 富山大学和漢医薬学総合研究所 特命准教授 毛利千香
7	金沢大学資料館 平成 30 年度特別展「石の博物誌」 金沢大学資料館 館長 奥野 正幸
9	京都・大学ミュージアム連携の台湾展 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 館長 並木誠士
10	平成 31 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞 香川大学博物館 館長 寺林 優

大学博物等協議会 2018 年度大会・第 13 回日本博物科学会開催報告

香川大学博物館 館長 寺林 優

第 21 回となる大学博物館等協議会 2018 年度大会および第 13 回日本博物科学会が 2018 年 6 月 21 日（木）・22 日（金）に、香川大学幸町キャンパスのオリーブスクエアで開催された。参加人数は 100 名（加盟館・機関 26 組織、他 8 組織）であった。

初日の協議会は、オリーブスクエア 2 階の多目的スペースで午後 1 時に開始した。実行委員長（寺林）の挨拶に始まり、開催校である香川大学の寛善行学長より、歓迎の言葉と今後のリベラルアーツ教育においては、本物を見抜く力が必要となり、大学博物館の担う役割がより重要になる旨の祝辞が述べられた。

続いて、協議会シンポジウム「大学博物館と地域との連携」へ移り、伊藤文紀香川大学副館長からの趣旨説明の後、石垣忍氏（岡山理科大学生物地球学部教授・恐竜学博物館長）より、「大学らしい博物館のあり方とは？」、松本由樹氏（香川大学農学部准教授・香川大学博物館会議委員）より、「博物館の多面機能を活かした地域連携～持続可能な資源循環の『みえる化』を目指して～」、谷地森秀二氏（認定 NPO 法人四国自然史科学研究センター）より、「あと必要なのは箱ものだーNPO 法人が行う地域の博物館的活動」と題しての講演が行われた。

その後、伊藤副館長と寺林の司会で、パネルディスカッションを行った。最初に、松本慶一氏（NPO

法人みんなでつくる自然史博物館・香川）より、話題提供があった。次に、活発な議論に移る計画であったが、残念ながらフロアからの質問や意見がほとんど出ず、パネルディスカッションの難しさを痛感しながらシンポジウムは閉幕した。

シンポジウム終了後は、博物科学会のポスター発表（8 本）が、オリーブスクエア 2 階の教員交流ラウンジで実施され、活発な質疑・意見交換が展開された。同会場では、各館の紹介ポスターも掲示された。

同時刻に、館長会議と博物科学会理事会を香川大学図書館 2 階のラーニングコモンズで開催した。ラーニングコモンズは、グループでの協調学習などアクティブな学びのためのスペースであり、アクティブラーニングに適した机とカラフルな椅子に、加盟館の館長や代表者が地域ごとに座った。館長会議や総会では、議論が紛糾して予定時刻に終わらないことがあるが、和やかな雰囲気でも終わった。明るい室内環境と施設による雰囲気の影響かもしれないが、事務局の東京藝術大学大学美術館に周到なご準備をいただいたおかげである。

協議会総会の冒頭では、京都国立博物館の佐々木丞平館長から、日本で初めて開催される国際博物館会議（ICOM）となる第 25 回国際博物館会議京都大会（会期：2019 年 9 月 1 日～7 日）の紹介および協力依頼がなされた。

協議会総会および博物科学会総会終了後、隣接する大学会館 2 階のベーカーリーカフェ・ソラミで懇親会が開催された。香川大学学術・地域連携推

進室情報図書グループの叶井貫一郎リーダーの司会で、実行委員長（寺林）の挨拶に続いて、東京藝術大学大学美術館の薩摩雅登教授による乾杯のご発声の後、和やかな雰囲気の中で情報交換が行われた。毎年の懇親会では、各地の名産品・特産品や銘酒が並び、時には民謡踊りが披露されるなど、開催校としては苦心のしどころである。高松観光コンベンション・ビューローからの助成や企業による協賛、香川大学の研究で生産が実現した希少糖を含んだシロップ「レアシュガースウィート」入りの希少糖ハイボールの提供などもあり、讃岐三畜「オリーブ牛、讃岐コーチン、讃岐夢豚」の料理を次々と出すことができた。実行委員長（寺林）が、香川大学生生活共同組合の前理事長であったことも多少は功を奏したのかもしれない。最後に、次年度の開催校である秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館の今井忠男館長による挨拶をもってお開きとなった。

2日目の博物科学会は、オリーブスクエア2階の多目的ホールで「教育」「研究」「地域と社会連携」「情報」「マネジメント」「その他」のカテゴリー順に、計16題の口頭発表が昼食を挟んで行われた。いずれの発表も、各館や演者の積極的な取り組み

で、発表後には活発な討議が行われた。

香川大学生協食堂は、全国の大学食堂で唯一うどん製麺所を備えており、当日のうどんコーナーは学会専用となり、参加者は打ちたての讃岐うどんに舌鼓を打った。昼食後は香川大学博物館で開催中の特別展「香川大学博物館10年間の歩み」とバックヤードを見学する参加者もみられた。

発表終了後は、国の特別名勝「栗林公園」の見学に34名が参加した。バス2台で移動し、現地で10名ほどのグループに分かれて、ボランティアガイドの説明を聞きながら庭園散策をした。栗林公園観光事務所の話では、全国の大学博物館に携わる者を案内するということで、ガイドの方々はかなり緊張されていたとのことであったが、興味を惹きつける説明は参加者にとって実りあるものだった。

梅雨明け前にもかかわらず、両日とも好天に恵まれ、香川大学での大学博物等協議会および日本博物科学会を無事に終了することができた。ひとえに関係各位のご協力のおかげである。特に香川大学学術・地域連携推進室情報図書グループの全面的なバックアップに深く感謝する。



寛善行香川大学長の祝辞



シンポジウムのパネルディスカッション



博物科学会ポスター発表



館長会議



懇親会



博物科学会口頭発表



大学生協食堂の讃岐うどん製麺所



香川大学博物館見学



特別名勝栗林公園見学

資料をめぐる国立歴史民俗博物館のミッションについて

国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市、以下歴博）では、2016年度から2022年度までの歴博における基幹ミッションとして、共同研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を実施しています。

人文情報ユニット、異分野連携ユニット、地域連携・教育ユニットの3グループに分かれて研究を進めており、これらを館内にある「メタ資料学研究センター」を中心に取りまとめています。

本研究の詳細は、ニューズレター vol.20 や Web サイト（<https://metaresource.jp/>）にも掲載しておりますので、ご確認いただけますと幸いです。今回は、特に2018年度の具体的な活動についてご紹介いたします。

研究グループのうち人文情報ユニットでは、大きな成果として、2018年5月に歴史情報の共同利用基盤となるシステム“khirin(knowledgebase for historical resources in institutes)”を公開しました(<https://khirin-ld.rekihaku.ac.jp/>)。この情報基盤の特徴は、複数の資料をリンクでつなぎ、異なるデータベースを横断的に見られることです。あるデータベースのデータのひとつをキーワードとして、他のデータベースのデータへと芋づる式にアクセスできるようになっています。例えば、khirin収録データベースのうち「歴民カード 歴史・公開用」から、資料所在地として「佐倉」を検索すると、「天球儀」が出てきます。この「天球儀」に付されたリンクをクリックすると、当館の館蔵資料データベースにアクセスできます。このほか時代や地域をキーワードとしてリンクを辿り、情報

を得ることも可能です。

このシステムをもとに、資料情報のリンクを今後より豊かにするためには、さらなるメタな（資料データをキーワードに読み替えるための）情報整備が必要です。また、国際的な共同利用の観点からは、海外における日本資料の呼称や定義が問題となります。こうした状況を踏まえ、6月には米国 Getty 研究所と、台湾中央研究院の研究者を迎え、国際研究集会を日本アート・ドキュメンテーション学会との共催で実施しました。この国際研究集会では、国際的な文化財等の語彙データベースである Getty Vocabularies のしくみと事業展開について理解を深め、国内諸機関の研究者とともに、日本全体としていかに対応していくかを議論しました。

さらに、9月には千葉大学と連携して、千葉大学附属図書館所蔵の「町野家文書」の画像デジタルデータの共同公開を開始しました。IIIF (International Image Interoperability Framework) という技術を応用し、歴博から画像を配信することで、千葉大学と歴博の両方での画像閲覧を実現しています。人文情報ユニットでは、このような連携をより多くの機関に広げていくことを目指しています。

また、異分野連携ユニットでは、和紙の混合物の分析を集中的に実施しています。これまでの和紙の文化財科学的研究の多くは繊維などに集中しており、混合物などについては研究の余地が多く残されていました。そこで、異分野連携ユニットでは前近代の文書の混合物を集中的に調査し、東京大学史料編纂所や米沢市上杉博物館などとも共同する形で分析を進めています。研究会もすでに2018年度だけで3回実施するなど、精力的に検討を進めています。今後は和紙の特性ごとにデータ化を行い、和紙の総合的な“料紙学”の確立を目

指します。

地域連携・教育ユニットの活動に際しては、特に大学教育との連携を重視しました。例えば、長崎大学大学院多文化社会学研究科の授業として「総合資料学」を開講しました。受講生は、オムニバス形式で複数の教員から様々な資料の見方について学ぶとともに、テーマに沿って自分たちで「モバイルミュージアム」を活用した展示を制作しました。

「モバイルミュージアム」とは、当館が開発した持ち運び可能な小型の展示台です。受講生は展示台の決められたスペースの中で、自分たちの考え

る資料や文化の像をどのように示すか、プロジェクト・ベースド・ラーニング形式で取り組みました。今後は、この取り組みを他大学にも広げていくとともに、より多くのプログラムを提供できるようにすることで「総合資料学」の学としてのありかたを具体化していく予定です。

このように、総合資料学の事業は、データの共同利用などの連携、和紙分析などの共同研究の連携、教育などの連携を、いずれも大学とともに展開しています。今後も大学と大きく連携するプログラムを実施し、総合資料学という新たな「学問の場」を作り出すべく、事業を推進していきます。



khirinの利用例：搭載データベースから外部データベースへリンク



和紙の混合物の非破壊分析



長崎大学の学生たちによるモバイルミュージアムの検討風景

「2018年夏、再オープン！東京工業大学博物館」

東京工業大学博物館 研究員 棚橋 沙由理

東京工業大学博物館は、建物修繕工事のためおよそ1年にわたり閉館を余儀なくされていたが、2018年8月より再開館を果たした。本稿では、2018年度より新しく立ち上げたミニ展示および学生サークルとの事業展開について紹介する。

まず、大岡山キャンパスにある本学本館にて、本学で生成された教育・研究の成果物を紹介する意図にて「東工大の逸品」と称するミニ展示を始めた。本館はその大きさもさることながら、桜のプロムナードから続く玄関のアーチや正面高くの時計塔が目を引く、大学を象徴する重厚な建物である。本館の玄関に入ってすぐ正面はガラス張りとなっており、その向こう側に展示ケース（80 x 105 x 120cm）が設置されている。陽の光の降り注ぐゆとりのある空間となっており、とくに日中は

多くの人が行き交う。

2018年7月から9月にかけての3ヶ月間は、「発生学研究の材料としてのウニやヒトデたち」と、同年10月から2019年1月にかけての4ヶ月間は、「レーウエンフックの顕微鏡－肉眼で見るよりもっと小さな世界へ」と、そして2019年2月から4月にかけての3ヶ月間は、「みんなのスパコンTSUBAMEの軌跡」と題した展示をそれぞれ行った（図1）。「発生学研究の材料としてのウニやヒトデたち」では、本学生命理工学院の佐藤節子博士の協力のもとに、モデル生物である棘皮動物（タコノマクラ、ハスノハカシパン、バフンウニ、コシダカウニ、サンショウウニ）の骨格標本および写真を用いた展示をおこなった。そして、卵と精子と融合、受精卵の細胞分裂過程における分裂装置の形成や分裂面決定の仕組み、そしてその過程における卵表層に生じる力といった発生生理学の研究内容を紹介した。「レーウエンフックの顕微鏡－肉眼で見るよりもっと小さな世界へ」

では、微生物学の父と称えられる貴重なレーウェンフックの顕微鏡のレプリカとともに光学顕微鏡ならびに木箱に入れられたプレパラートも布置した。顕微鏡の持主である同生命理工学院学院の石島純夫博士の許諾を得て、顕微鏡を譲り受けるに至るまでの留学先の研究室での心温まる師弟エピソードを紹介した。そして、「みんなのスパコン TSUBAME の軌跡」では、本学情報理工学院の松岡聡特任教授の協力のもとに、2006年に導入されたスパコンの第二世代（現在は第三世代）であるTSUBAME2.5のユニットとともに、TSUBAMEの性能およびこれまでに実現した研究成果を紹介した。アンケートを回収したところ、観覧者から「とても珍しいものがかざってある うらやましいですよ」や「博物館だけでなく、今回のように学内に展示していただけると人目を引いて良いと思います。」といった好意的な感想を得ることができた。

次に、博物館と学生サークルとの協働事業として展開したワークショップおよび企画展を紹介する。まず、2019年3月2日、本学博物館を擁する百年記念館にて小学生親子を対象とするプログラミング・ワークショップ「プログラミングでLEGO ロボット」を本学公認プログラミング系サークルおよび教育革新センターの協力のもとに開催した。Cricketを用いたプログラム作成により、参加者自身がレゴ®や画用紙などで製作したおもちゃを動かせるという内容である。2時間のワークショップ

の間、サークルの学生が丁寧に対応してくれたため、事後アンケートで「面白かった」と回答した参加者が9割と大変好評のうちに終了した（図2）。

さらに、上記と同様に博物館と学生サークルとの協働事業として「東工大サークルフェスーものづくり系サークル編ー」を3月22日から4月6日にかけて開催した。プログラミング系サークルに加え、デザイン系サークル、レゴ系サークルそしてロボット系サークルといったものづくり系4サークルの協力を得て、多種多彩な作品を展示した。今年度より新設した20平米ほどの企画展示室内を縦横4等分して各サークルに割り当てる形で、展示台や展示ケースを設置しそこに作品およびサークル紹介パネルを布置した。とくに、プログラミング系サークルでは、サークル内で製作されたゲームを展示室で楽しめるようにしたり、ロボット系サークルではロボットの動態展示を行い来館者も動作できるようにしたりといった新しい試みに挑戦した。企画展についても、来館者から「作品から熱意が伝わった」「ハイレベル」と高い評価を得ることができた。また、事業に参画してくれたサークルの学生からも「今後、博物館を活動の場の一つとして捉えていきたい」という前向きな声が聞かれた（図3）。今後も引き続き、博物館に収蔵・展示する古いモノを新しい魅せ方で積極的に紹介し、大学の魅力発信基地の一つとして、教職員それぞれの個性を発揮し役割を果たしたいと思う。



図1. ミニ展示「東工大の逸品」

a: 発生学研究の材料としてのウニやヒトデたち（2018年7～9月）

b: レーウェンフックの顕微鏡—肉眼で見るよりもっと小さな世界へ（2018年10月～2019年1月）

c: みんなのスパコン TSUBAME の軌跡（2019年2～4月）

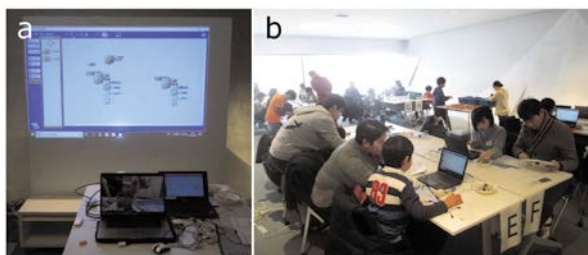


図2. プログラミング・ワークショップ「プログラミングでLEGOロボット」

a: プログラムの作成方法

b: 百年記念館4階の会場にて作業する来館者親子



図3. ものづくり系サークル企画展

「東工大サークルフェス

ものづくり系サークル編」

a: 手芸作品と折り紙作品 [デザイン系サークル]

b: 自主制作のゲーム [プログラミング系サークル]

c: レゴ作品 [レゴ系サークル]

d: 自主制作のロボット [ロボット系サークル]

富山大学 和漢医薬学総合研究所 民族薬物資料館 「生薬の変遷 —近年50年の歴史—」

富山大学和漢医薬学総合研究所 特命准教授 毛利千香

本館の端緒は、1973年に当時の富山大学薬学部に増設された生薬標本室に遡り、その後の富山医科大学の新設に伴って生薬標本は1980年に新キャンパスへ移動、1985年に現在のおよそ半分の床面積の民族薬物資料館に収蔵されました。各国・地域の研究者との共同研究を通じて、それらの地域に特有の生薬・製剤標本が収蔵品として増加する中、1994年、2010年に建物が増築され、現在ではアジア全域を網羅する約30,000点の標本を収蔵する、世界有数の生薬博物館といえます。生薬とは、薬効をもつ天然物の保存性や利便性、効能を向上・改変させるため、乾燥させたり、乾燥前に酒・塩・蜜などによる処理や特殊な加熱などを施したものです。漢方薬は通常数種類の生薬によって構成され、その構成方法を示す漢方医学は、日本人に対してより効果が発揮されるよう中国医学が改良されたものです。医学体系が中国に由来するので、日本で使用される生薬は中国原産のものが多く、生薬の中国からの輸入は現在でも全体の約8割に上り、日本産はわずか1割にすぎません。私事ですが本館に着任して一年が経過し、昨年度開催した一般公開などの活動を通して、本館の収蔵標本が、社会や経済、地球環境など世界の様々な変化や問題を反映していることに気がきました。

「生薬の変遷 —近年50年の歴史—」と題して2018年10月21日に実施した一般公開開催のきっかけは、1970年頃の標本の、美しく充実した様に驚いたからでした。これらに較べ、近年収蔵され

た標本は貧弱になっている印象を受けます。この一般公開では、生薬の変遷の例として甘草（主に *Glycyrrhiza uralensis* Fisch. の根）などを取り挙げ、1970年代から現代に至る様々な年代の標本、またそれらに付随して、同一種であっても産地間で異なる形態をもつ標本や（写真参照）、輸出入量変遷のデータ、日本における漢方薬をとりまく医療・教育現場での動向、WHOが発行してきた伝統医学に対するガイドラインなどを合わせて展示しました。この展示に合わせて行なった、生薬の輸入に長年携わってこられた榊本天海堂の山本豊氏のご講演からは、私自身多くの知見を得ることができました。

甘草は、7割を超える漢方薬（漢方処方）中に配合される、最も使用頻度が高い生薬です。中国北部の草原地帯が主な自生地である甘草は、過剰採取が現地の砂漠化を誘発するとして、1984、2000年に中国国務院から採取規制が通達されました。外務省貿易統計による1970年から1990年の日本の甘草輸入量は年間約1万トンでしたが、それ以降は減少し、2001年以降は年間1500-2000トン程度になっています（グラフ参照）。2000年の国務院通達時のことは私も覚えており、甘草の輸入が本当に途絶えるのではないかと思っていましたが、そうならなかったのは、輸入交渉に関わった多くの人々の努力の賜物だろうと、今回の展示を通して改めて思われました。過剰採取が資源を減少させ、生薬の伝統的な名称にも変化を起こしました。1990年代前半まで、特定の産地を表す名称が日本に輸入される甘草には付記されていましたが、産出量の減少で見かけられなくなったものが多くあります。今では甘草に付記される産地は、より大きな範囲を示すものが主流になっ

ています。また、近年は甘草の栽培品が市場に出回るようになってきました。現在の中国の社会的な変化、例えば採薬従事者の減少や、高齢化に伴う中国国内需要の上昇といったことも、日本国内の流通に影響を及ぼしています。

漢方薬というと、アルミパックに入ったエキス剤（粉薬）に馴染んでいる方も多いかと思います。日本の9割の医者が漢方薬を処方した経験がある現在、日本へ輸出される生薬の質・量の維持は、日本の医療の質に深く影響すると言えます。近年の日本では、2001年に医学教育で和漢薬の知識が必修化、2012年に薬局で販売される一般用漢方処方が294に増加するなどし、生薬や漢方薬の正しい使用や効能について、認識が広まっていることと思います。WHOが1977年以降発表している生薬の品質やその評価、研究方法等に関するガイドラインが発表さ

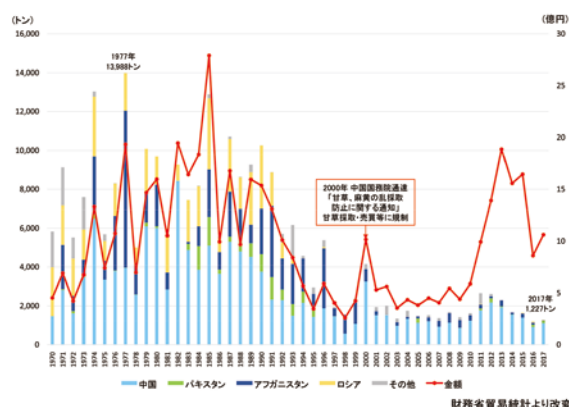


展示された甘草標本の一部

れ続けていることも、世界が生薬を必要としている現れだと言えます。

皆さんの館の資料にも、それぞれ独特の背景や歴史があることと思いますが、生薬についても同様です。資源の減少、経済性からの人材減少、高齢化や国ごとの使用量変化などの社会的要因などを考慮すると、日本に流通する生薬の質・量の維持には、これまで以上に関係者の努力が必要になりそうですし、本館へ収蔵される標本も様々に変化してゆくことでしょう。

なお、当館の生薬標本のうち約13000点はデータベースで検索可能です（<https://ethmed.toyamawakan.net/>）。生薬に関する宋代の代表的な書物である「証類本草」、江戸時代の民間救急法を記した「広恵濟急方」の現代語訳も合わせてご覧いただければ幸いです。



日本への甘草国別輸入量と輸入金額の推移（1970-2017年）

金沢大学資料館 平成30年度特別展「石の博物誌」

金沢大学資料館 館長 奥野 正幸

金沢大学資料館（以下資料館）では、平成16年度以降毎年「特別展」の実施に力を入れ、図録の発行も行ってきた。平成30年度の特別展は、「石の博物誌」と題して、資料館展示室において2018年9月19日（水）から10月28日（日）まで37日間開催され、1,415名の入館者があった（図1）。

資料館の主要な収蔵資料は、加賀藩校扁額、加賀藩士や幕末庶民の日記、第四高等学校物理実験機器群などの歴史的な文書、工芸、教育資料などが中心である。他方、金沢大学及び前身校には自然史分野においても多くの著名な研究者がいたが、

資料館にはそれほど多くの自然史資料は収蔵されていない。しかし、鉱物学、古生物学、植物学、生態学等の研究室や標本庫には多くの自然史資料が収蔵されていて、研究や授業に於いて利用されている。それらの資料のなかには、貴重なタイプ標本や現在では入手が難しい化石や鉱物資料が多数含まれている。そこで、この特別展では、自然史資料の代表ともいえる「石」に焦点を当てて展示を行った。

2016年9月に金沢大学で開催された日本鉱物科学会に於いて、日本の国石として「翡翠（ひすい：Jadite / NaAlSi₃O₆）」が選ばれ、また、これに先立って、本学の地球科学者が中心となって日本地質学会の石川県の石として「珪藻土：Diatomaceous earth / 主にSiO₂からなる」と「霰（あられ）石：

京都・大学ミュージアム連携の台湾展

京都工芸繊維大学美術工芸資料館 館長 並木誠士

京都工芸繊維大学美術工芸資料館が運営委員会の事務局をつとめる「京都・大学ミュージアム連携」（以下、連携）の初の海外展覧会「京都好博學 UNIVERSITAS 京都・大学ミュージアム連携出張 in 台湾」が、2018年12月15日から2019年2月24日まで国立臺北教育大学北師美術館（台湾）で開催された。連携に加盟する13大学ミュージアム（今回、大谷大学博物館は出品せず）が所蔵する資料から212点を選んで展示した展覧会であった。

連携では、2011年度の結成以来、京都（2012年度）、博多（2013年度）、多賀城（2014年度）、那覇（2015年度）、京都（2016年）と合同展覧会を開催し、各地の大学ミュージアムと交流してきた。その過程で、海外との交流も模索してきたが、それを受け止めてくださったのが、国立臺北教育大学の林曼麗先生だった。故宮博物院の院長もつとめた林先生は、台湾の文化部、教育部などに働きかけて、展覧会受け入れのために尽力してくださった。京都側でも、京都府・京都市・京都商工会議所、京都信用金庫などに協賛金のお願いにまわり、なんとか実現にこぎつけた。なかでも、明治期の高等教育に多くの教材を提供した島津製作所からは大きなご支援をいただくことができた。

今回の展覧会は全体を三部構成として、①京都からの発信として京都の歴史や文化を示す資料類を、②大学ミュージアムならではの資料として教材・生徒作品・教師作品などを、そして、③京都の各大学に所蔵される台湾関係の資料類にわけて展示をした。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館からは、京都文化の発信として、京都で制作された鍔や櫛などの工芸品類や京都関係のポスター、着物や紅板締めなどの道具を、大学の教育・研究を示す資料として、本学の前身校のひとつである京都高等工芸学校初期の教員が教材として購入したヨーロッパのポスターや生徒による課題作品を、そして、台湾に関連する資料として、やはり開学当初に購入された台湾原住民の衣装や土器、「台湾風情」と題されたガラススライドを出品した。いずれも、台湾では初公開の作品ばかりであったが、昔の大学の教室や研究室をイメージした北師美術館の展示室のなかで、他の大学ミュー

ジアムの作品と並んで、台湾の人びとの目を楽しませていた。

美術工芸資料館には、5万点を超える資料・作品が収蔵されているが、そのなかに、台湾関係の資料が多く保存されていることは、これまでほとんど知られていなかった。美術工芸資料館に収蔵されている台湾関係の資料は、いずれも開学当初に図案科の標本として登録されているもので、日本統治時代の台湾で収集された資料を図案資料として購入した可能性がある。実際に、今回展示をした衣装や模型の舟、土器には独特の文様がほどこされており、それが当時の生徒たちに図案の例として示されたと考えることができる。これらの衣装類や工芸品などの資料は、いずれも初の里帰りであり、会期終了時に資料の特別観覧がおこなわれるなど、台湾の歴史の空白を埋める資料として現地の研究者の注目を集めた。これを契機に両国のあいだの学術・研究レベルでの交流がいままで以上に活発になることが期待される。

京都大学、京都教育大学に所蔵されている島津製作所がてがけた教材としての模型類は、臺灣大学や会場校である臺北教育大学にも同様のものが収蔵されていた。19世紀末から20世紀初頭にかけての高等教育において日本と台湾の両地で島津製作所の模型が重要な役割を果たしたことがわかり、大変興味深かった。これまで展示することのなかったこのような資料を公開できたのも、大学ミュージアムの特性をいかした企画の成果である。さらに、会期中には、京都外国語大学、京都大学の学生、院生によるワークショップもあり、幅広い交流がおこなわれた。

複数の大学ミュージアムが共同で海外展を実施することは、日本ではじめての試みかもしれない。資料の運搬ということだけをとりあげても、かなり煩瑣な作業が必要となり、実務担当者の献身的な仕事があれば実現は不可能であった。連携のこれまでの活動を考えても、活動を支える人材の存在は必須であることがあらためて実感された。

京都・大学ミュージアム連携の活動は台湾でも注目されており、これを契機に台湾国内でも大学ミュージアムの連携を模索する動きも生まれている。この成果は、本年9月に京都で開催されるICOM（国際博物館会議）世界大会でも、日台両国から発表する予定である。今回の展覧会が、日本と台湾とのあらたな交流の第一歩であると同時に、大

学や大学ミュージアムにかかわる学生や若い研究者

のこれからの交流の出発点となることを期待する。



展示室



台湾関係資料を説明する國立成功大学の郭教授



國立臺北教育大学入り口

平成 31 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞

香川大学博物館 館長 寺林 優

科学技術分野に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者に贈られる平成 31 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を、本館前副館長の寺尾徹香川大学教育学部教授（併任期間：2013 年 4 月～2019 年 3 月）、村山聡香川大学教育学部教授、寺林優香川大学博物館長（香川大学創造工学部教授）、末永慶寛香川大学創造工学部教授、日本大学理工学部の畔柳昭雄特任教授の 5 名が受賞した。表彰式は、2019 年 4 月 17 日（水）に文部科学省において執り行われた。

科学技術賞の理解増進部門は、青少年をはじめ広く国民の科学技術に関する知識の普及啓発等に寄与する活動を行った個人又はグループに贈られるもので、「持続可能社会への地域の知恵に学ぶ水環境と減災の理解増進」の業績が高く評価されたものである。地球温暖化に伴う気候の極端化や南海トラフ巨大地震などの災害脅威に対応し、水環境の保全と減災を実装するために、持続可能な社会の仕組みづくりを推進するというグローバル課題への地域社会の関心と機運は、かつてなく高まっている。本活動は、少雨特性を有し、常に水を大切にしてきた讃岐地方の歴史と活動、瀬戸内海を SATOUMI として育てる先人の歴史に根差した活動、瀬戸内地方のレジリエントで持続可能な海洋空間の活用、南海トラフ巨大地震や地球温暖化に伴う災害特性研究など、瀬戸

内地域の水環境保全の知恵を持続可能社会と減災に活かす科学技術のシーズを育て、講演、エキスカッション、シンポジウム、学会、論文等により、全国および世界へ発信してきた。本活動により、(1) 防災対策への意識高揚、(2) 震災復興後の地先海域で操業可能な漁場づくり、(3) 里海の創生と保全に関する学びと交流の場の拡大等を通して、グローバルな持続可能社会の実現をめざし、地域社会における水環境と減災についての理解の増進、そして、レジリエントな地域社会に向けた科学技術に対する理解の増進に寄与している。今回の表彰は、これらの理解増進活動が評価されたものである。

本館に係る活動としては、第 11 回企画展「讃岐ため池 そーっとのぞいてみよう展」（会期：2013 年 7 月 19 日～8 月 31 日）とその関連行事「仏生山ため池歴史秘話・自然探索ウォーキング」（実施日：2013 年 9 月 1 日）、第 37 回ミュージアム・レクチャー「地震・津波を知り南海トラフ巨大地震に備えるー高松に何が起こるかー」（実施日：2015 年 3 月 25 日）、みつびしでんき野外教室「藻場造成と豊かな海づくり」（実施日：2017 年 3 月 25 日）などがある。

寺林は、平成 25 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を「自然史系標本資料活用の拠点形成による科学への理解増進」で受賞しており、同賞の受賞は 2 度目となる。表彰式後には、共同受賞者 1 名と参議院議員会館を訪れ、林芳正前文部科学大臣に受賞を報告するとともに、大学博物館について意見交換した。



受賞した5名（左から2人目が寺林、3人目が寺尾前副館長）



林芳正前文部科学大臣に受賞を報告（左が寺林）

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

弘前大学資料館

“装う” アフリカ ―世界との交錯のなかで―

2019年6月1日（土）～7月20日（土）
弘前大学資料館

弘前大学と昆虫学（仮称）

2019年7月29日（月）～11月2日（土）（予定）
弘前大学資料館

東京藝術大学大学美術館

藝大コレクション展 2019

第1期 2019年4月6日（土）～5月6日（月・休）
第2期 2019年5月14日（火）～6月16日（日）
大学美術館 本館

コミテコルベールアワード 2019

2019年11月9日（土）～11月20日（水）
大学美術館 本館

円山応挙から近代京都画壇へ

前期 2019年8月3日（土）～9月1日（日）
後期 2019年9月3日（火）～9月29日（日）
大学美術館 本館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

2019年12月中旬
大学美術館 本館

退任記念 手塚雄二展

2019年10月10日（木）～10月24日（木）
大学美術館 本館

保科豊巳退任記念展「萃点」^{ずいてん}（仮称）

2020年1月7日（火）～1月19日（日）
大学美術館 本館

呼吸する彫刻―北郷悟彫刻展（仮称）

2019年11月7日（木）～11月17日（日）
大学美術館 本館

東京藝術大学卒業・修了作品展

2020年1月28日（火）～2月2日（日）
大学美術館 本館、東京藝術大学構内、東京都美術館

内包された温度―旅の途中―展（仮称）

2019年11月7日（木）～11月17日（日）
大学美術館 本館

※事情により展覧会名称、会期等が変更になる場合があります。

東京工業大学博物館

A Drop of Science 展

第1期 2019年5月24日（金）～6月8日（土）
第2期 2019年10月12日（土）、13日（日）の前
後20日程度を予定
東京工業大学百年記念館（博物館）2階企画展示室

金沢大学資料館

インターメディアテク 博物誌シリーズ(3) 特別展示
「アートか、サイエンスか ― 知られざる四高遺産から」
2019年2月16日(土)～5月12日(日)
東京大学総合研究博物館 インターメディアテク
※東京大学総合研究博物館、金沢大学資料館、石川
県立自然史資料館連携事業

春季企画展「金大資料館コレクション展 2019: 保存と修復 第2章」
2019年3月28日(木)～6月28日(金)
金沢大学資料館展示室

夏季企画展『金沢高師2代校長「塩野直道展」』(仮題)
2019年7月5日(金)～8月23日(金)
金沢大学資料館展示室

30周年記念特別展「資料館の30年」(仮題)
2019年9月2日(月)～10月28日(月)
金沢大学資料館展示室

金沢城内アウトリーチ写真展「あのころの金沢大学」
2019年10月18日(金)～11月5日(火)
金沢城公園内 河北門

学生企画展「いろは」(仮題)
2019年11月18日(月)～2020年1月28日(火)(予定)
金沢大学資料館展示室

愛知学院大学歯学部歯科資料展示室

歯の神様 ― 神さま・仏さま・歯医者さま ―
2019年4月19日(金)～2020年3月31日(火)の開館日(火・金 午前10時～午後4時)
楠元キャンパス 歯学薬学図書館情報センター1階

国立歴史民俗博物館

よみがえる地域文化 ― 岐路に立つ共同体のいま ―
2019年7月23日(火)～11月4日(月・休)
第4展示室

もののけの夏 ― 江戸文化の中の幽霊・妖怪 ―
2019年7月30日(火)～9月8日(日)
企画展示室

ハワイ: 日本人移民の150年と憧れの島のなりたち
2019年10月29日(火)～12月26日(木)
企画展示室

石鹸・化粧品の近現代史
2019年12月3日(火)～2020年5月6日(水・休)
第4展示室

描かれた寺社境内
2019年12月24日(火)～2020年2月2日(日)
第3展示室

和宮ゆかりの雛かざり
2020年2月26日(水)～4月5日(日)
第3展示室

昆布とミョク ― 潮香るくらしの日韓比較文化誌 ―
2020年3月17日(火)～5月17日(日)
企画展示室